The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	校訂鬼谷子三巻訳稿 (3)
Author(s)	高田, 哲太郎
Citation	中国研究集刊. 2007, 43, p. 84-109
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60999
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　為号（総四十三号）平成十九年六月　八四―一〇九頁

校訂鬼谷子三巻訳稿（3）

髙田哲太郎

巻中（後半）「謀第十」、「決第十一」、「符言第十二」「轉丸」（亡）、「胠篋」（亡）
巻下（前半）「本經陰符七術」（盛神法五龍）

謀　第十

凡謀有道。必得其所因、以求其情[1]。審得其情、乃立三儀。三儀者、曰上、曰中、曰下。參以立焉、以生奇。奇不知其所擁、始於古之所從[2]。故鄭人之取玉也、載司南之車、爲其不惑也。夫度材、量能、揣情者、亦事之司南也。故同情而相親者、其俱成者也。同欲而相疏者、其偏成者也[3]。同惡而相親者、其俱害者也。同惡而相疏者、偏害者也[4]。故相益則親、相損則疏、其數行也。此所以察同異之分也[5]。故墻壞於其隙、木毀於其節、斯蓋其分也[6]。

36

◎「凡謀有道」の上、道蔵本「爲人」の二字有り。衍。嘉慶十年本によって削る。◎「成」、道蔵本、嘉慶十年本「害」に作る。俞樾の説に従って改める。◎「其」、道蔵本欠。嘉慶十年本によって補う。

謀　第十

凡そ謀に道有り。必ず其の因る所を得て、以て其の情を求む。審に其の情を得れば、乃ち三儀を立つ。三儀とは、曰く、上、曰く、中、曰く、下。參、以て立て、以て奇を生ず。奇は其の擁する所を知らず、古の從ふ所に始る。故に鄭人の玉を取るや、指南の車に載る、其の惑

はざるが為なり。夫れ材を度り、能を量り、情を揣する者も亦、事の指南なり。故に情を同じうして相ひ親しむ者は、其の成るを俱にする者なり。欲を同じうして相ひ疎んずる者は、其の成るを偏にする者なり。悪を同じうして相ひ親しむ者は、其の害を俱にする者なり。悪を同じうして相ひ疎んずる者は、害を偏にする者なり。故に相ひ益すれば則ち親しみ、相ひ損すれば則ち疎んずるは、其の数の行なり。此れ同異の分を察する所以なり。故に墻は、其の隙より壊れ、木は其の節より毀たる、斯れ蓋し其の分なり。

36」

謀　第十

そもそも、「謀」、はかりごとには、「道」、然るべき方法というものがある。必ずその事が基くところをつかみ、そこでその本音を求めるのである。詳細確実にその本音をつかんだなら、「三儀」、三種の方法を立てる。「三儀」とは、上、中、下策の三者である。三種立てて、そこから奇計（優れて説得的な方法）を生み出す。奇計とは、自由自在であり、それが守るべき、しがみつくべき何者かがあるわけではない。古の人が従ったところから始まるのである。それ故に、鄭人が玉を取りに行った時に、指南車に乗ったのは、自らが惑わないようにするためだった。

そもそも、人物を測り、その能力を量り、情、本音を揣し推し量るのも、同様に物事の指南、目安なのである。

それ故に、気持ちが同じだとして近づいてくるのは、そのことを共に完成させようとしているのである。したい事が同じでありながら、反発するのは、そのことを自分だけで完成させようとしているのである。同じものを憎んでいるとして近づいてくるのは、そのものを共に損なおうとしているのである。同じものを憎みながら、反発するのは、自分だけで損なおうとしているのである。

それ故に、相手として利益になるならば親しみ、相手として損になるなら疎んずるというのは、親疎における道理上当然の流れである。これが同異の分、自らと立場を同じくするか否かの区別を推察するための前提、相手のエゴのありかをつかむすべである。それ故に、壁垣は、その隙間から壊れ始め、木は、その節目の部分から折られるというのは、本当にそれに備わる当然の定めであろう。

36」

1　得其所因、則其情可求。見情而謀、則事無不擠。

2 言審情之術、必立上智、中才、下愚。三者參以驗之、然後奇計可得而生。奇計既生、莫不通達。故不知其所擁蔽。然此奇計非自[今]也。乃始於古之順道而動者。蓋從於順也。

3 同情、[謂]欲共謀立事。事若俱成、後必相親。若乃一成一害、後必相疏、理之常也。

4 同惡、謂同爲彼所惡。後若俱害、情必相親、若乃[一全一害、後]必相疏、亦理之常也。

5 同異之分、用此而察。

6 墻木[圜]毀、由於隙節。況於人事之變、生於同異。故曰、斯蓋其分[也]。

故變生事、事生謀、謀生計、計生議、議生說、說生進、進生退、退生制。因以制於事。故百事一道而百度一數也[7]。夫仁人輕貨、不可誘以利、可使出費。勇士輕難、不可懼以患、可使據危。智者達於數、明於理、不可欺以[不]誠、可示以道理、可使立功、是三才也[8]。故愚者易蔽也、不肖者易懼也、貪者易誘也。是因事而裁之[9]。故爲强者、積於弱也。[爲直者、積於曲也。]有餘者、積於不足也。此其道術行也[10]。

◎「故變生事」、道藏本「故變生於事」に作る。「於」字衍。嘉慶十年本によって削る。◎「不」、道藏本欠。嘉慶十年本によって補う。◎「爲直者、積於曲也」、道藏本欠。嘉慶十年本によって補う。

故に変は事を生じ、事は謀を生じ、謀は計を生じ、計は議を生じ、議は説を生じ、説は進を生じ、進は退を生じ、退は制を生ず。因りて以て事を制す。故に百事は一道にして、百度は一数なり。夫れ仁人は貨を軽んずれば、誘ふに利を以てすべからざるも、費を出さしむべし。勇士は難を軽んずれば、懼れしむるに患を以てすべからざるも、危に拠らしむべし。智者は数に達し、理に明るければ、欺くに不誠を以てすべからざるも、示すに道理を以てすべく、功を立てしむべし、是れ三才なり。故に愚者は蔽はれ易く、不肖者は懼れ易く、貪者は誘はれ易し。是れ事に因りて之を裁く。故に強を為す者は、弱を積むなり。直を為す者は、曲を積むなり。餘有る者は、不足を積むなり。此れ其の道術の行なり。

それ故に、事態の変化は、事とするものを生じ、事は謀、その事に対するはかりごと、構想を生じ、謀は計、

具体的計画を生じ、計は議、対応調整を生じ、議は説、理念を生じ、説は進、実際の行動を生じ、進は退、そのことを含めた全体をコントロールする立場を生ずる。そこでその事をコントロールするのである。それ故に、すべてのことは同一の道、方法によるのであり、すべての法則は、一つの理に還元されるのである。（事の変化が心を変じ、言を生じ、言が行動を生じ、新たな状態を位置づけ収束する。言葉がすべてを統制するのである。）

そもそも仁人、慈しみのある人は、財貨を軽んずる傾向があるので、利益誘導したりはできないが、慈しみの心に訴えて、費用を出させることができる。勇士は苦難を軽んずる傾向があるので、艱難によって懼れさせて動かすことはできないが、常人なら避ける危機に立ち向かわせることができる。智者は、物事の本質をつかみ、道理に明るいので、誠ならざるもので欺くことはできないが、物の道理を示して理解させることができ、その結果然るべき成果を挙げさせることができる。これが三才、用うべき智、仁、勇三つの才能である。

それ故に、智者の対極である愚者（対外的対応能力に欠ける者）は、言葉が相対であることがわからずに、決まりきった意味しかないとしがみついているので、言葉に蔽われやすく、勇者の対極である不肖者（対内的対応能力に欠ける者、エゴイスト）は、相対的で不安定な今の自分だけが本当の自己だと執着し、その不安定なものを常に守ろうとするので、相対的立場、言葉の変化に恐れやすく、仁者の対極にある貪者は、相対的自己の利益が絶対だと執着しているので、言葉により利益誘導されやすいのである。これ等は、具体的なことによって、これを判断類別する。

それ故に、強大なものは、弱いものを積んだのである。真直ぐなものは、曲がったものを積んだのである。余りあるものは、足りないものを積んだのである。（この世に完全なものは存在しない以上、その特性をつかみ、結果としてこちらの意図を達成するように運用するのである。）これが、その道術、あるべきあり方を具体化し、実際に行うということである。

37」

7　言事有根本。各有從來。譬之、卉木因根而有枝條花葉。故因變隙。然後生於事業。生事業者、必須計謀。成計謀者、必須議說。議說者、必有當否。故須進退之。既黜陟、須別事以爲法、而百事百度何莫由斯而至。故其道數、一也。

8　使輕貨者出費、則費可全。使輕難者據危、則危可安。使達數者立功、則功可成。總三才而用之、可以光輝千里、豈徒十

二乘而已。

9 以此三術[取]彼三短、可以立事立功也。謀者因事興慮、宜知而載之。故曰因事而裁之。

10 柔弱勝於剛强。故積弱可以爲强大。直若曲、故積曲可以爲直。少則得衆。故積不足可以爲有餘。然則以弱爲强、以曲爲直、以不足爲有餘、斯道術之所行。故曰、道術行也。

故外親而內疏者說內、內親而外疏者說外[11]。故因其疑以變之、因其見以然之[12]。因其說以要之、因其勢以成之[13]。因其惡以權之、因其患以斥之[14]。摩而恐之、高而動之[15]、微而[證]之、符而應之[16]。擁而塞之、亂而惑之。是謂計謀[17]。38」

◎「證」、道藏本「正」に作る。嘉慶十年本によって改める。

故に外、親しみて、内、疎んずる者は、内を説き、内、親しみて、外、疎んずる者は、外を説く。故に其の疑に因りて以て之を変じ、其の見によりて之を然し、その説に因りて以て之を要し、其の勢に因りて以て之を成し、其の悪に因りて以て之を権り、其の患に因りて以て之を斥く。摩して之を恐れしめ、高くして之を動かし、微にして之を證し、符して之に応じ、擁して之を塞ぎ、乱して之を惑はす、是れを計謀と謂ふ。38」

それ故に、外面では親しみながら、内心では疎んじている者に対しては、その内心で疎んずる要因になっているものを説いて排除し、内心では親しみながら、外面では疎んずる者に対しては、その外面で疎んずる要因になっているものを説いて排除する。それ故に、相手のこちらに対する疑いに基いて、それを変化させ、相手のものの見方、見解に基いて、それを肯定して安心させ、相手の主張する考えに基いて、それをまとめて心のうちに整理させ、相手の立場に基いて、それを確信できる既成のものとさせ、相手の憎み嫌うものに基いて、それを相手の思いの全体の中に位置づけさせ、相手の心配事に基いて、それを無用の物として排除させる。「摩」し、探りを入れて相手を恐れさせ、相手を高めることを言って動かしたり、微妙な方法で相手に確証を与え、証拠を示してその思いを確信させたり、こちら以外の言うことを聞かないように抱え込んで相手の目を塞ぎ、混乱する情報を与えて相手を惑わしたりする。これを「計謀」という。38」

11 外陽相親而內實疏者、說內以除其內疏也。內實相親而外陽疏者、說外以除其外疏也。

12 若內外無親而懷疑者、則因其疑以變化之。彼或因變而有所見、則因其所見以然之。

13 既然見彼或有可否之說、則因其說以要結之。可否既形、便有去就之勢、則因其勢以成就之。

14 去就既成、或有惡患、則因其惡也、爲權量之、因其患也、爲斥除之。

15 患惡既除、或恃勝而驕者、便切摩以恐懼之、高危以感動之。

16 雖恐動之、尙不知變者、則微有所引據以證之、爲設符驗以應之也。

17 雖爲設引據符驗、尙不知變者、此則或深不可救也。便擁而塞之、亂而惑之、因抵而得之。如此者、可以爲計謀之用也。

計謀之用、公不如私、私不如結。結而無隙者也[18]。正不如奇。奇流而不止者也[19]。故說人主者、必與之言奇。說人臣者、必與之言私[20]。其身內、其言外者疏。其身外、其言深者危[21]。無以人之所不欲而强之於人。無以人之所不知而敎之於人[22]。人之所好也、學而順之。人之有惡也、避而諱之。故陰道而陽取之也[23]。故去之者、縱之、縱之者乘之[24]。貌者不美又不惡。故至情託焉[25]。 39」

◎「無以人之所不欲」、道藏本「無以人之所近不欲」に作る。「近」字衍。嘉慶十年本によって削る。◎「託」、道藏本「托」に作る。嘉慶十年本によって改める。

計謀の用、公は私に如かず、私は結に如かず。結は而(すなは)ち隙無き者なり。正は奇に如かず。奇は流れて止まらざる者なり。故に人主に說く者は、必ず之と奇を言ふ。人臣に說く者は、必ず之と私を言ふ。其の身、內にして、其の言、外なる者は疎んぜらる。其の身、外にして、其の言、深き者は危し。人の欲せざる所を以て、之を人に强ふる無かれ。人の知らざる所を以て、之を人に敎ふる無かれ。人の好む所は、学びて之に順ふ。人の惡む有るや、避けて之を諱む。故に陰道にして之を陽取す。故に之を去らんとする者は、之を縱(ほしいまま)にせしめ、之を縱にする者は、之に乘ず。貌なる者は美ならず、又惡ならず。故に至情は焉に託せらる。 39」

この「計謀」の用い方として、「公」（その社会が認知する公的な関係、立場）は、「私」（その人の好悪、利害に基く関係、立場）には及ばない。そして、この「私」は、「結」（心を一つにしている者の関係、立場）には及ばない。「結」は、融合した隙のない関係なのである。同様に、「正」（世間の認める基準にかなったもの）は、「奇」（そのときその事態にかなった方法）には及ばない。「奇」は、特定のかたちに縛られず、流れてとどまらずに自由に対応する。それ故に、君主に説く者は、必ず君主と「奇」策について語り、人臣に説く者は、必ずその臣下と「私」事について語るのである。

その人が身内の立場にあるのに、その言葉が外部に漏れるような人は疎んぜられる。その人自身、よそ者の立場にあるのに、その言葉が深く立ち入ったものであれば、身に危険が及ぶ。

その人が望まないものを、その人に強制してはならない。その人が知らないことを、そのレベルを超えてその人に教えてはいけない。その人が好むものは、学んでそれに順い、その人が憎んでいるものがあれば、避けて、その人の前で口にしない。（相手の好悪、エゴに触れてはいけない。）それ故に、密かな方法、つまり相手のエゴに触れないように対応して、結果としてはっきりした形でこちらの意図を達成する。それ故に、追い出したいと思う人には、その人の好きにさせ、その人が調子に乗って増長して来たら、その機に乗ずる。人間関係の様相というものは、美しいものではない、又醜いものでもない、このように位置づける。それ故に、このようなあり方に至情、こちらの本当の意図は宿されるのである。　39」

18 公者、揚於王庭、名爲聚訟、莫執其咎、其事難成。私者、不出門庭、慎密無失、其功可立。故曰、公不如私。雖復潛謀、不如彼要結。二人同心、物莫之間、欲求其隙、其可得乎。

19 正者、循理守常、難以速進。奇者、反經合義、因事機發。故正不如奇。奇計一行、則流通而莫知止也。故曰、奇流而不止者也。

20 與人主言奇、則非常之功可立。與人臣言私、則保身之道可全。

21 身在內而言外泄者、必見疏也。身居外而言深切者、必見危也。

22 謂其事雖近、彼所不欲、莫强與之。將生恨怒也。教人當以所知。今反以人所不知者教之、猶以暗除暗、豈爲益哉。

23 學順人之所好、避諱人之所惡、但陰自爲之、非彼所逆、彼必感悅、明言以報之。故曰、陰道而陽取之也。

24 將欲取之、必先聽縱、令極其過惡。過惡既極、便可以法乘之。故曰、縱之者乘之也。

25 貌者、謂察人之貌、以知其情也。謂其人中和平談、見善不美、見惡不非。如此者可以至情[託]之。故曰、至情[託]焉。

可知者、可用也。不可知者、謀者所不用也[26]。故曰、事貴制人、不貴見制於人。制人者、握權也。見制於人者、制命也[27]。故聖人之道陰、愚人之道陽[28]。智者事易而不智者事難。以此觀之、亡不可以爲存、而危不可以爲安。然而無爲而貴智矣[29]。智用於衆人之所不能知、而能用衆人之所不能見[30]。既用、見可擇事而爲之、所以自爲也。見不可擇事而爲之、所以爲人也[31]。故先王之道陰、言有之曰、天地之化、在高與深、聖人之制道、在隱與匿。非獨忠信仁義也、中正而已矣[32]。道理達於此[之]義、則可與言[33]。由能得此、則可[以]穀遠近之義[34]。 40」

◎「見可擇事」、道藏本「見可否擇事」に作る。「否」字衍。俞樾の説に従って削る。◎「此之義」、道藏本「此義之」に作る。顚倒。嘉慶十年本によって改める。◎「以」、道藏本「與」に作る。嘉慶十年本によって改める。

知るべき者は、用ふべきなり。知るべからざる者は、謀者の用ひざる所なり。故に曰く、事は人を制するを貴び、人に制せらるるを貴ばず、と。人を制するとは、権を握るなり。人に制せらるるとは、命を制せらるるなり。故に聖人の道は陰、愚人の道は陽なり。智者は易を事とし、不智者は難を事とす。此を以て之を観るに、亡は以て存と為すべからず、危は以て安と為すべからず。然り而うして無為にして智を貴ぶ。智は衆人の知る能はざる所に用ひ、能は衆人の見る能はざる所を用ふ。既に用ひ、事を択ぶべきを見て之を為す、自ら為にする所以なり。事を択ぶべからざるを見て之を為す、人の為にする所以なり。故に先王の道は陰なり。言、之(これ)有りて曰く、天地の化、高と深とに在り、聖人の道を制するは、隱と匿とに在り、と。独り忠信、仁義のみに非ず、中正のみ。道理、此の義に達すれば、則ち與に言ふべし。能く此を得るに由らば、則ち以て遠近の義を穀すべし。 40」

知ることのできるものは、使うことのできるものである。知ることのできないものは、主体的に関われないので、はかりごとをする者は、使わないものである。それ

故に、次のように言われる。「関係する事柄で大切なのは、人を制し主体を確保することであり、人に制せられることは貴ぶべき事ではない。」と。人を制するというのは、権を握ること、死命を制し、その人の価値判断の根拠となることである。人に制せられるというのは、命、その人の存在自体を左右する言葉を制せられコントロールされることである。それ故に、聖人の道、あり方は、陰、制せられる命から己を隠すあり方であり、愚人の道、あり方は、陽、表に情、本音を明らかにし、支配されるようなあり方である。智者は、己の立場にとらわれ拘ったりせず、為すべき事をしようとするので、易、たやすく実現できることをしようとするが、智ならざる者は、己にとらわれ、自分の頭の中の理想をそのまま現実に当てはめようとするので、実現の困難なことをしようとする。以上のことから考えるなら、愚人や不智者のあり方は、自己を中心に多くの知識を集め、それで自らの立場を安定させようとするものだが、それは「亡」であり、「危」であり、この「亡」、自らの主体を失うようなあり方は、「存」、主体を保持しているとはできないし、「危」、自らの主体を危険な状態にするようなあり方は、「安」、主体を安定させているとすることはできない。そうであるにもかかわらず、聖人、智者は、彼らとはさかさまに、己にとらわれず、無為なる立場にあって、この愚人、不智者も尊重する智を貴ぶのである。従って、聖人、智者の「智」は、己という立場にとらわれた衆人が知ることのできないものに用い、「能」、その能力、はたらきは、衆人が見ることのできないものを用いる。それは、衆人が自分では知ることのできない衆人自身の前提、己そのもの（心）に対して用いられるのであり、衆人自身が見ることのできない衆人自身の視点自体を成立させる、己にとらわれない心からする言葉のはたらきを用いるのである。それは、心に対し「中正」（心そのものに中り適う。）であることによる。そして、用いたときに事を選ぶことができるのを見て、この智を行うのは、自分自身のあるべきあり方のためだからであり、事を選ぶことができないのを見て、それでもこの智を行うのは、人々のためだからである。

それ故に、先王（古代の理想的支配者）の道、あるべきあり方は、「陰」、我を立てず己を越えてあるべくあるということなのである。このような言葉が残されている。「天地の化、万物を変化させるはたらきは、われわれの存在、意識（我）を越えた高く、又深いレベルにその根拠があるのであり、聖人が、道、あるべきあり方を統制するのは、隠と匿（我、エゴからは見えない隠された心）

にその根拠があるのである。」

つまり、ただ（儒家の言う）忠信、仁義という心の一面からとらえたものだけという訳ではない、心そのものに中り適う「中正」ということなのである。道理、あるべきあり方の筋道について、その人の視点が、このレベルの意味に到達したなら、一緒に話のできるレベルにある。この「中正」を得ることができるなら、遠近の義、彼我の相対ということの意味についての認識を養い育てることができるだろう。　40」

26　謂彼情寛密、可令知者、可爲用謀。故曰、可知者、可用也。其人不寛密、不可令知者、謀者不爲用謀也。故曰、不可知者、謀者所不用也。

27　制命者、言命爲人所制也。

28　聖人之道、內陽而外陰、愚人之道、內陰而外陽。

29　智者、寛恕。故易事。愚者猜忌。故難事。然而不智者、必有危亡之禍、以其難事。故賢者莫得申其計畫、則亡者遂亡、危者遂危、欲求安存、不亦難乎。今欲存其亡、安其危、則他莫能爲。惟智者可矣。故曰、無爲而貴智矣。

30　衆人所不能知、衆人所不能見、智獨能用之、所以貴於智矣。

31　亦既用智先己而後人。所見可否、擇事爲之、將此自爲。所見不可、擇事而爲之、將此爲人。亦猶伯樂教所親相駑駘、教所憎相千里也。

32　言先王之道、貴於陰密。尋古遺言、證有此理曰、天地之化、唯在高深、聖人之制道、唯在隱與匿。所隱者、中正自然合道、非專在忠信仁義也。故曰、非獨忠信仁義也。

33　言、謀者曉達道理、能於此義達、則可與語至而言極矣。

34　穀、養也。若能得此道之義、則可居大寶之位、養遠近之人、誘於仁壽之域也。

決　第十一

凡決物、必託於疑者善其用福、惡其有患。害至於誘也[1]、終無惑、偏有利焉、去其利、則不受也。奇之所託[2]、若有利於善者隱、託於惡、則不受矣、致疏遠[3]。故其有使失利者、有使離害者、此事之失[4]。　41」

◎「凡決物」の上、道藏本「爲人」の二字有り。衍。嘉慶

十年本によって削る。◎二字の「託」、道蔵本それぞれ「托」に作る。嘉慶十年本によって改める。◎「者」、道蔵本「其」に作る。嘉慶十年本によって改める。

決　第十一

凡そ物を決する、必ず疑ふ者の其の福を用ふるを善とするも、其の患有るを悪むに託る。害、誘ふに至るや、終に惑ふ無きは、偏に利有るも、其の利を去れば、則ち受けざればなり。奇の託る所、若し善しとするに利有る者は隠し、悪むに託らば、則ち受けずして疎遠を致す。故に其の利を失はしむる者有り、害に離らしむる者有るは、此れ事の失なり。41」

決　第十一

およそ物事に決断を下すのは、必ず疑い迷う者が、その福、利点を用いるのを善しとしているが、その悪、不安な点があることを嫌っていることによるのである。その決断に伴う害が、心を誘うことがあっても、最終的には迷うことがないのは、そうしないことが部分的には利益があっても、その利点を意識して除去したなら受け付けないからである。「奇」、優れた見識ある決断でも、もし相手が善しとする考えにとっての利点は隠し、相手が嫌う考えによって示すなら、相手は受け入れず、疎んぜられ遠ざけられてしまう。それ故に、決断させられなかったことが、結果として彼我の利益を失わせることがあったり、損害を蒙らせることがあるのは、これは決断ということでの失策である。41」

1　有疑、然後決。故曰、必託於疑者。凡人之情、用福則善、有患則悪。福患之理、未明、疑之所由生。故曰、善其用福、悪其有患。然善於決疑者、必誘得其情、乃能斷其可否也。

2　懐疑曰惑、不正曰偏。決者、能無惑偏、行者乃有通濟。然後福利生焉。若乃去其福利、則疑者不受其決、更使託意於奇也。趨異變常曰奇。

3　謂疑者本其利善、而決者隠其利善之情、反託之於悪、則不受其決、更至疏遠矣。

4　言上之二者、或去利託於悪。疑者既不受其決、則所行罔能通濟。故有失利羅害之敗。凡此皆決事之失也。

聖人所以能成其事者有五。有以陽德之者、有以陰賊之者、有以信誠之者、有以蔽匿之者、有以平素之者[5]。陽勵於一言、陰勵於二言。平素樞機、以用四者、微而施之[6]。於是度之往事、驗之來事、參之平素、可則決之[7]。公王大人之事也、危而美名者、可則決之[8]。不用費力而易成者、可則決之[9]。用力犯勤苦、然而不得已而爲之者、可則決之[10]。去患者、可則決之。從福者、可則決之[11]。故夫決情定疑、萬事之機、以正治亂、決成敗、難爲者[12]。故先王乃用蓍龜者以自決也[13]。　42」

◎「治亂」、道藏本「亂治」に作る。嘉慶十年本によって改める。

聖人の能く其の事を成す所以の者に五有り。陽を以て之を徳する者有り、陰を以て之を賊する者有り、信を以て之を誠にする者有り、蔽を以て之を匿す者有り、平を以て之を素にする者有り。陽は言を一にするに勵め、陰は言を二にするに勵む。平素は枢機、以て四者を用ひ、微にして之を施す。是に於て之を往事に度り、之を来時に験し、之を平素に参じ、可なれば則ち之を決す。公王大人の事や、危にして名を美にする者は、可なれば則ち之を決す。費力を用ひずして成し易き者は、可なれば則ち之を決す。力を用ひ勤苦を犯す、然れども已むを得ずして之を為す者は、則ち之を決すべし。患を去る者は、可なれば則ち之を決す。福に従ふ者は、可なれば則ち之を決す。故に夫の情を決し、疑を定むるは、萬時の機にして以て治乱を正し、成敗を決するも、為し難き者なり。故に先王は、乃ち蓍亀なる者を用ひ以て自ら決するなり。　42」

聖人が、決断という事を達成する方法には、五つある。「陽」、積極性によってその事を徳し育てるということがあり、「陰」、消極性によってその事を賊し損なうということがあり、「信」、信用することによってその事を誠、実あるものにするということがあり、「蔽」、視野からはずすことによってその事を考慮の範囲外に隠すということがあり、「平」、日常化することによってその事を「素」、もともとそうである様なごく当たり前のことにするということがある。

「陽」、積極性は、言を一にし、同じ事を言うことに努める。「陰」、消極性は、言を二にし、そうでもよいが、そうでなくともよいというように、事を相対化することに努める。「平、素」は、日常的に当たり前の事とするものであり、これが、枢機、すべての行動の中軸として、「陰、陽、信、蔽」の四者を用い、密かにこれらを実施する。

そこで、決断しようとすることを、往事、過去の事例を参考に推し量り、これを来事、将来に具体化し得る事かを実験し、更にこれを平素の状態として当てはめてみて、実行可能であれば、そのことに決断を下す。「公王、大人の事」、人を管理する立場にある者の事としては、危険があっても、名、正当な社会的評価を高めるようなものは、可能であれば、これを決断する。費用労力を用いずに完成させやすいものは、可能であれば、これを決断する。労力を用い、勤め苦しむようなことを敢えてしなければならないが、その立場にあるものとしては、やむを得ずこれを行うべき様なものは、これを決断するのが宜しい。患、心配事、気にかかることを解決するようなものは、可能であれば、これを決断する。そうするほうが、「福」、よい状態になるようなものは、可能であれば、これを決断する。

それ故に、情、本音を一定方向に決し、疑問、不安を切り捨て、安定した状態を得るということは、すべての「機」、要であり、治乱を正し、秩序を生み出し、成敗を決し、事がうまくいくかどうかを決するものなのであるが、決断には、為しがたいものがある。そこで、先王、古代の理想的支配者は、めどぎや亀卜などの占いという形式を用いて、それをきっかけとして、自らその決断を下したのである。

42」

5 聖人善變通、窮物理。凡所決事期於必成。事成理著者、以陽德決之。情隱言偽者、以陰賊決之。道誠志直者信誠決之。姦小禍微者、以蔽匿決之。循常守故者、以平素決之。

6 勵、勉也。陽、爲君道。故所言必勵於一。一、無爲也。陰、爲臣道。故所言必勵於二。二、有爲也。君道、無爲。故以平素爲主。臣道、有爲。故以樞機爲用。言一也、二也、平素也、樞機也。四者其所施爲、必精微而契妙。然後事行而理不難。

7 君臣既有定分。然後度往驗來、參以平素、計其是非於理。既可則爲之決也。

8 危、由高也。事高而名美者則爲決之。

9 所謂惠而不費。故爲決之。

10 所謂知之所無奈何、安之若命。故爲之決。

11 去患從福之人、理之大順。故爲決之也。

12 治亂以之正、成敗以之決、失之毫釐、差之千里、樞機之發、榮辱之主。故曰、難爲。

13 夫以先王之聖智、無所不通、猶用蓍龜以自決。況自斯已下、而可以專己、自信不博謀於通識者哉。

符言　第十二[1]

◎「符言」篇の内容は、ほぼ『管子』「九守篇」と其の文義が一致する。

安徐正靜、其被節無不肉[2]。善與而不靜、虛心平意以待傾損[3]。

右　主位[4]　43」

◎「右」字、道藏本は以下の総ての「主〇」の篇題に於いて「有」に作る。嘉慶十年本によって総て改める。

符言　第十二

安徐正静なれば、其の被節、肉ならざる無し。善く與るも静ならざれば、虛心平意、以て傾損を待つ。

右　主位　43」

符言　第十二

安徐正静、心が安らかで、緩やかに、歪みなく、物に動かされなければ、その身の節度、対応は充分でないものはない。善く関わっても、相手が心をあちこちと動かし、静められないなら、こちらは虛心平意、とらわれず平常の気持ちを保ち、相手がこちらに傾き、自らの意を抑損し、へりくだるのを待つ。

右　主位（人を管理する立場にある者の要とするもの）　43」

1 發言必驗、有若符契、故曰、符言。

2 被、及也。肉、肥也。爲饒裕也。言人若居位能安徐正靜、則所及之節度、無不饒裕也。

3 言人君善與事接而不安靜者、但虛心平意以待之、傾損之期必至矣。

4 主於位者、安徐正靜而已。

目貴明、耳貴聰、心貴智[5]。以天下之目視者、則無不見。以天下之耳聽者、則無不聞。以天下之心慮者、則無不知[6]。輻湊並進、明不可塞[7]。

右　主明[8]　44」

目は明を貴び、耳は聡を貴び、心は智を貴ぶ。天下の目を以て視る者は、則ち見ざる無し。天下の耳を以て聴く者は、則ち聞かざる無し。天下の心を以て慮る者は、則ち知らざる無し。輻湊(ふくそう)し並び進まば、明、塞ぐべからず。

右　主明　44」

目にとっては、明、はっきり見ることが大切であり、耳にとっては、聡、はっきり聞くことが大切であり、心にとっては、智、はっきりと知ることが大切である。己にとらわれない天下の目でものを見れば、見えないものはない。天下の耳で話を聴けば、聞こえないものはない。天下の心で物事を慮れば、わからないことはない。車の輻（スポーク）が中心に集まるように、人々の明、聡、智が、その人に集まり、すべてその人に向かうなら、その人の明は、蔽い塞ぐことなどできない。

右　主明（はっきりとものを見ることにとって大切な事）　44」

5　目明則視無不見、耳聰則聽無不聞、心智則思無不通。此三者無擁則何措而非當也。

6　唏在帝堯、聰明文思、光宅天下、盍用此道也。

7　夫聖人不自用其聰明思慮而任之天下。故明者爲之視、聰者爲之聽、智者爲之謀、若雲從龍、風從虎、沛然而莫之能禦。輻湊并近、不亦宜乎。若日月照臨、其可塞哉。故曰、明不可塞也。

8　主於明者以天下之目視也。

徳之術曰、勿堅而拒之[9]。許之則防守、拒之則閉塞[10]。高山仰之可極、深淵度之可測、神明之徳術正靜、其莫之極[11]。

右　主徳[12]　45」

◎「徳」、道蔵本「位」に作る。嘉慶十年本によって改める。

徳の術に曰く、堅にして之を拒む勿れ、と。之を許さ

ば則ち防守するも、之を拒まば則ち閉塞す。高山は之を仰いで極むべく、深淵は之を度りて測るべきも、神明の徳術は正静、其れ之を極むる莫し。

右　主徳　45」

徳の術、心のはたらかせ方は、次のように言われる。「堅、頑なな態度で人を拒んではならない。」様々な人のあり様を許し認めるなら、人は帰属意識を持って従い、組織を守ろうとするが、頑なで拒むようなところがあれば、人はそれぞれの殻に閉じこもり、組織は閉塞する。

高い山は、高いといっても、一つの形として位置づけられる以上、仰ぎ見て、それをこうだと限定できるし、深い淵も、深いといっても、一つの形であり、結局測ることでこうだと位置づけられるが、神明の徳術、そこからはこうだととらえられないが、優れた心のはたらかせ方は、正静、心のあるべきあり方に合致し、我によって動かされず、そのもののままであり、本当にこれをこうであると位置づけることはできない、無限に対応するものなのである。

右　主徳（心のはたらきにとって大切な事）　45」

9　崇徳之術、在於恢宏博納。山不讓塵、故能成其高。海不辭流、故能成其深。聖人不拒衆、故能成其大。故曰、勿堅而拒之也。

10　言許而容之、衆必歸而防守。拒而逆之、衆必違而閉塞。歸而防守、則危、可安。違而閉塞、則通更塞。夫崇徳者、安可以不宏納哉。

11　高莫過山、猶可極、深莫過淵、猶可測、若乃神明之徳術正静、迎之不見其前、隨之不見其後、其可測量哉。

12　主於徳者、在於含宏而勿距也。

用賞貴信、用刑貴正[13]。賞賜貴信、必験耳目之所見聞、其所不見聞者、莫不闇化矣[14]。誠暢於天下神明、而況姦者干君[15]。

右　主賞[16]　46」

賞を用ふるは信を貴び、刑を用ふるは正を貴ぶ。賞賜は信を貴び、必ず耳目の見聞する所に験すれば、其の見聞せざる所の者、闇化せざる莫し。誠、天下に暢ぶるこ

と神明、而るに況んや姦者の君に干むるものをや。

右　主賞　46」

表彰するときに大切なことは、「信」、本当に評価しているというこちらの意思が相手に伝わることであり、処分、処罰するときに大切なことは、「正」、筋が通っていること、動かし難い妥当性が備わっていることである。恩賞を与えるときに、この「信」を大切にし、必ずこうするというところを、自らが関係している範囲にはっきりと示したなら、その人物が直接は関係していない人々は、密かにその態度を改めない者はない。「誠」、己を虚しくし、白を白と言い切る心の現れは、その世界に人知では計り知れないが、はっきりと行き渡る。まして、賤しい心根で、君主に利を求めようとしている者には、尚更はっきりと影響する。

右　主賞（褒めることで大切な点）　46」

13 賞信則立功之士、致命捐生、刑正則受戮之人、没齒無怨也。

14 言施恩行賞、耳目所見聞、則能驗察不謬、動必當功。如此則信在言前、雖不見聞者、莫不闇化也。

15 言每賞必信、則至誠暢於天下、神明保之如赤子、天祿不傾、如泰山。又況不逞之徒而欲奮其姦謀于於君位者哉。此猶腐肉之齒、劍鋒接必無事矣。

16 主於賞者、貴於信也。

一曰天之、二曰地之、三曰人之[17]。四方上下、左右前後、熒惑之處安在[18]。

右　主問[19]　47」

一に曰く、之に天あり、二に曰く、之に地あり、三に曰く、之に人あり。四方上下、左右前後、熒惑の処、安にか在る。

右　主問　47」

すべての対象には、第一に天が有り、第二に地が有り、第三に人が有る。（天とは、そのものにとっての大前提、理念的存在根拠であり、地とは、その前提下に於ける具

体的条件であり、人とは、その条件下における具体的活動に相当する。）このように分類対応したなら、四方上下、左右前後、対応に迷うところがあるだろうか。

右　主問（問題を立てるときに大切な点）　47」

17　天有逆順之紀、地有孤虛之位、人有通塞之分。有天下者宜皆知之。

18　夫四方、上下、左右、前後皆有陰陽向背之宜。有國從事者、不可不知。又熒惑、天之法星、所居災眚、吉凶尤著。故曰、雖有明天子、必察熒惑之所在。故亦須知之。

19　主於問者、須辨三才之道。

心爲九竅之治、君爲五官之長[20]。爲善者、君與之賞、爲非者、君與之罰[21]。君因其所以求、因與之、則不勞[22]。聖人用之。故能賞之。因之循理。故能久長[23]。

◎「君因其所以求」、道藏本「君因其政之所以求」に作る。嘉慶十年本によって「政之」の二字を削る。◎「故」、道藏本「固」に作る。嘉慶十年本秦恩復の案語「案一本作故。鄧析子亦作故。故固古字通。」及び『管子』九守篇の文によって改める。

右　主因[24]　48」

心は九竅（きうけう）の治を為し、君は五官の長為り。善を為す者、君、之に賞を與へ、非を為す者、君、之に罰を與ふ。君、其の求むる所以に因りて、因りて之に與ふれば、則ち労せず。聖人、之を用ふ。故に能く之を賞す。之に因るは理に循ふ。故に能く久長なり。

右　主因　48」

心は、口、耳、目などの九竅（九穴）の調整をし、君は、五官（百官）の長である。善を為す者には、君は心と同様にその人物に賞を与え、非、不善を為す者には、君は罰を与える役目がある。それ故、君は五官が何故それを求めているのかという理由に基き、そこで五官にその求めているものを与えたなら、苦労するところはないのである。聖人はこの考え方を用いる。それ故に五官を然るべく賞することができるのである。五官が求めているところに基くというのは、道理に従うことである。それ故に永続性あるあり方ができるのである。

右　主因（何を根拠に支配するかということ）　48」

20 九竅運爲、心之所使、五官動作、君之所命。

21 賞善罰非、爲政之大經也。

22 與者、應彼所求。求者得應而悅。應求則取不妄、得應則行之無怠。循性而動。何勞之有。

23 因求而與、悅莫大焉。雖無玉帛、勸同賞矣。然因逆理、禍莫速焉。因之循理。故能長久。

24 主於因者、貴於循理。

人主不可不周。人主不周、則群臣生亂[25]。家于其無常也、內外不通、安知所開[26]。開閉不善、不見原也[27]。

右　主周[28]　49」

人主は周からざるべからず。人主周からざれば、則ち群臣、乱を生ず。其の常無きに家するや、内外通ぜず、安んぞ開く所を知らん。開閉善ならざるは、原を見ざるなり。

右　主周　49」

君主は、中心として相応しくあるように、あまねく偏りなく対応しなければならない。君主があまねく偏りなく対応しなければ、群臣は、混乱を起し、比周して徒党を組む。君主が常のないあり方に居座るなら、その心の内と外の情報は通ぜず、妥当な判断が下せなくなる。それでどうして口を開き意を伝えるべき相手がわかろうか。口を開くと閉じること、つまり、捭闔し主体を保持することがうまくいかないというのは、原点を見ない、中心に相応しく対応していないからである。

右　主周（あまねく偏りなく対応することの要点）　49」

25 周、謂徧知物理。於理不周、故群臣亂也。

26 家、猶業也。群臣既亂。故所業者無常而內外閉塞、觸途多礙。何如知所開乎。

27 開閉、卽捭闔也。既不用捭闔之理。故不見爲善之源也。

28 主於周者、在於徧知物理。

一曰長目、二曰飛耳、三曰樹明[29]。明知千里之外、隱微之中、是謂洞。天下姦、莫不闇變[30]。

右　主恭[31]　50」

◎「明知」、道蔵本欠。嘉慶十年本によって補う。◎「變[30]」の下、道蔵本「更」字有り。嘉慶十年本によって削る。

一に曰く、目に長ず。二に曰く、耳に飛す。三に曰く、明を樹つ。明なれば千里の外、隱微の中に知らる、是れを洞と謂ふ。天下の姦、闇変せざる莫し。

右　主恭　50」

一つには、目に優れたものとして示す。二つには、耳にそのあり方を飛し伝える。三つには、明を樹て、歪みないあり方、見識を自らの口から出して言葉にする。明、歪みなく妥当性ある見識であれば、遥か千里の外まで、隱微の中の隱れた人々にまで伝わる。これを「洞」、深いという。この様にすれば、その世界の姦、邪悪な者（エゴイスト）は、密かにその態度を変えない者はない。

右　主恭（我にとらわれずあるべくあることの大切な点）　50」

29 用天下之目視、故曰長目。用天下之耳聽、故曰飛耳。用天下之心慮、故曰樹明。

30 言用天下之心慮、則無不知。故千里之外、隱微之中、莫不玄覽。既察隱微。故爲姦之徒、絶邪於心腦。故曰、莫不闇變更改也。

31 主於恭者、在於聰明文思。

循名而爲實、安而完[32]。名實相生、反相爲情[33]。故曰、名當則生於實、實生於理[34]。理生於名實之德[35]、德生於和、和生於當[36]。

右　主名[37]　51」

名に循ひて実を為さば、安らかにして完し。名実相ひ生ずれば、反りて相ひ情と為る。故に曰く、名の当るは、則ち実より生じ、実は理より生ず。理は名実の徳より生じ、徳は和より生じ、和は当より生ず。

右　主名　51」

言葉に従い、それに相応しく行動するなら、心は安らかで、あり方としては完全である。言葉と実際が関わりあって生ずれば、そのようにした私というかたちで、その人の情、本質となる。それ故に次の様に言われる。「言葉が当たっている、相応しいというのは、相応しい実際のあり方から生じてくるものであり、その実際のあり方は、理、物の筋道に沿うことから生ずる。この理、筋道は、名実の徳、つまり言葉と実際を相応しく関係づけようとする心のはたらきから生ずるものであり、そしてこの徳、心のはたらきは、和、歪みない関わりあいから生じ、和は、当、妥当性ある判断から生じてくるものである。

右　主名（言葉の本質）　51」

32　實既副名、所以安全。

33　循名而爲實、因實而生名。名實不虧、則情在其中矣。

34　名當自生於實、實立自生於理。

35　無理不當、則名實之徳自生也。

36　有徳必和、能和自當。

37　主於名者、在於稱實。

轉丸　胠篋　二篇皆亡ー

◎「篋」道蔵本「亂」に作る。秦恩復に従って改める。◎「轉丸」篇、「胠篋」篇の内容は、武内義雄の研究によれば『意林』巻二に引用された『鬼谷子』の佚文の最後の二条と、『史記』太史公自序にある鬼谷子からの引用と思われるもの一条、及び『説苑』善説篇に引用された文がその一部分である。又「胠篋」篇は、『荘子』胠篋篇と同一のものであるとされる。胠篋篇については、嘉慶十年本の秦恩復の案語に、唐の趙蕤の『長短經』反經篇が『鬼谷子』に曰くとして『荘子』胠篋篇の文を引用している事を指摘する。武内氏にこの指摘が無いのは、或いは氏の見た秦恩復本は乾隆五四年刊本のみで、嘉慶十年刊本は未見であるからかも知れないが、いずれにせよこの論断に従い、巻末に『説苑』善説篇に引用された文、及び『意林』引用の二条、『史記』太史公自序にある鬼谷子からの引用、『荘子』胠篋篇の全文をそれぞれ付加した。『荘子』胠篋篇以外は総てひとま

ず「轉丸」篇に配当し、「轉丸篇佚文」として本文の最後（下巻）に付加した。

1 或有莊周胠篋而充次第者。按鬼谷之書、崇尚計謀、祖述聖智、而莊周胠篋、乃以聖人爲大盜之資、聖法爲桀跖之失、亂天下者聖人之由也。蓋欲縱聖棄智、驅一代於混茫之中、殊非此書之意。蓋無取焉。或曰、轉丸、胠亂者、本經、中經是也。

鬼谷子　巻中

鬼谷子　巻下

梁　陶　宏　景　注

本經陰符七術[1]

◎「術」道藏本「篇」に作る。嘉慶十年本「術」に作る。柳宗元「鬼谷子辨」に、「晚乃益出七術」とある。

盛神法五龍[2]

盛神中有五氣。神爲之長、心爲之舍、德爲之大。養神之所、歸諸道[3]。道者、天地之始、一其紀也。物之所造、天之所生、包宏無形、化氣先天地而成、莫見其形、莫知其名、謂之神靈[4]。故道者、神明之源、一其化端、是以德養五氣、心能得一、乃有其術[5]。術者、心氣之道所由舍者。神、乃爲之使[6]。九竅十二舍者、氣之門戶、心之總攝也。生受於天、謂之眞人。眞人者、與天爲一[7]而知之者。內修鍊而知之、謂之聖人。聖人者、以類知之[8]。故人與生一、出於物化[9]。知類在竅、有所疑惑、通於心術。心無其術、必有不通[10]。其通也、五氣得養、務在舍神。此之謂化[11]。化有五氣者、志也、思也、神也、德也。神其一長也。靜和者養氣。養氣得其和、四者不衰。四邊威勢無不爲、存而舍之。是謂神化歸於身。謂之眞人[12]。

眞人者、同天而合道、執一而養産萬類、懷天心、施德養、無爲以包、志慮思意而行威廓者也。士者通達之、神盛、乃能養志[13]。　52」

◎「大」、「於」、「物化」、道藏本「人」、「之」、「化物」に作る。嘉慶十年本によって改める。◎「心無其」、道藏本欠。嘉慶十年本によって補う。

本經陰符七術

神を盛にするは五龍に法る

盛神中に五気有り。神は之が長為り。心は之が舍為り、德は之を大と為す。養神の所は、諸を道に帰す。道は天地の始、一は其の紀なり。物の造る所、天の生ずる所、宏きを包みて形無く、気を化し天地に先んじて成るも、其の形を見る莫く、其の名を知る莫し。之を神霊と謂ふ。故に道は、神明の源、一は其の化端、是を以て德は五気を養ひ、心は能く一を得、乃ち其の術有り。術は、心気の道の由りて舍する所の者。神は乃ち之が使為り。九竅十二舍は、気の門戸、心の総摂なり。生まれながらにして天より受く。之を真人と謂ふ。真人は天と一と為りて之を知る者なり。内、修錬して之を知る、之を聖人と謂ふ。聖人は、類を以て之を知る。故に人は與に一に生じ、物化より出づ。類を知るは竅に在り。疑惑する所有らば、心術に通ず。心に其の術無くんば、必ず通ぜざる有り。其の通ずるや、五気を養ふを得。務は、神を舍するに在り。此を之れ化と謂ふ。化、五気を有つとは、志なり、思なり、神なり、德なり。神は其の一にして長なり。静和とは、気を養ふなり。気を養ひて其の和を得れば、四者衰へず。四辺の威勢為さざる無く、存して之に舍す。是れ神化、身に帰すと謂ふ。之を真人と謂ふ。真人は、天に同じて道に合し、一を執りて萬類を養産し、天心を懷き、德養を施し、無為、以て志慮、思意を包みて威勢を行ふ者なり。士たる者、之に通達せば、神、盛にして、乃ち能く志を養ふ。　52」

本經陰符七術

盛神法五龍（「神」、精神活動を盛んにするには、「五龍」に法る）

盛んな精神活動の中には、「五気」（五臓の気）がある。「神」（上位自我）はその官長であり、「心」はその居所であり、「德」（心のはたらき）は、それを大きくするものである。「神」を養うということは、「道」（ことば）

に基くものである。「道」（ことば）（0、無）は、天地の始り、つまり世界の前提であり、「一」（一、有）は、その「紀」、要である。〔「一」とは、「道」（0、無）に対して（一、有）ということで、我という意識が、我を、ことばによって我と認識し、我が有るとすること。「道」（0）が、「道」（0）を、「道」（0）である（一）とすること。すべては「有る」という一語に集約されるが故に「一」とは「有る」と同義である。〕

「道」（ことば）は、物（本体）が、物（対象）として造られるところであり、天（世界）が生み出されるところであって、全空間を規定するが、限定固定化される形を持たず（道可道、非常道）、気（万物の構成要素）を変化させ、天地以前に成立している（世界の前提としてことばがある）が、そのことば自体の具体的形というものはなく、ことば自体を定義することばは、結局ことばであって、それ以上名づけようもない。これを「神霊」、人知では計り知れぬ、ことばでとらえられない魂（ことば自体）という。

それ故、「道」は神明の源、不可知のはたらきをする大元であり、「一」はその変化の発端であり、だから、「徳」は五気を養い、心は「一」を得る（心が心であると自覚する）ことができるのであり、そこで、そのことばを扱う「術」（具体的ことば）、方法というものがある。

「術」とは、「心気の道」、気持ち（意思）の現れとしての道（ことば）が、具体的な形として示されたものである。

「神」、精神活動は、その使い、伝達のはたらきをするものである。

「九竅十二舎」（体にある九穴と、目、耳、鼻、口、身、意、色、声、香、身、触、事の十二の感覚器官と対象）は、気の門戸（気がそれを通して出入するかたち）であり、心がすべてを取り仕切るものである。これらは、先天的生得的に天から受け備わっているものである。この状態を、「真人」（完全な人）という。（人は生まれつき人としては本来完全であるということ。）「真人」は、天（人の前提、人を生み出したもの）と一体化し、自ら真人であることを自覚した者である。

自らの心の内、エゴの殻の中で修練し、その己を越えてこれを自覚した者、これを「聖人」という。「聖人」は、類（推）することで、「道」が「神明の源」と知るのである。それ故に、人は皆、「一」（有）（ことばによる規定）から生じ、「物化」（ことばによる対象の変化）により、人として出現しているのである。類を知る、同異の別を知り、白を白とする視点に到達するには、「竅」（穴）、感覚器官にその要点がある。疑い惑うところがあれば、それこ

そ到達への道であり、解決してゆくことにより、「心術」、心の扱い方に通ずるのである。心に心の扱い方がなければ、自ら自らを扱うという視点に到達していなければ、必ず通用しない部分がある。心が通ずるなら、五気を養うことができる。務めとする点は、「神」、最終決断を下す上位自我、を心に宿すところにある。これを「化」（コペルニクス的転換、自己相対化の視点の確立）という。この「化」が五気を保有するというのは、「志」（意思、欲望、エゴ）、「思」（思考、認識、配慮）、「神」（上位自我）、「徳」（評価し善しとする心のはたらき）の四者を保有するということである。「神」は、その一つで、官長である。静和、心が外物にひかれず調和するというのは、気を養うということである。気を養って、その調和を得るなら、志、思、神、徳の四者が衰えることはない。四辺への「威勢」（現象に流されず、白を白だと示し現実を改変しうる心のはたらき、影響力）は、ありとあらゆるものに対応し、確実にあり続け、心に宿る。これを「神化」が、つまり、己を越えてあるべくある視点に到達したその状態が、身に帰した、現実のものとなったというのである。これを「真人」という。「真人」は、天（その現象世界の前提）に同一化し、「道」（ことば）に一体化し（ことばを生み出す原点となり）、「一」（有）を執って（価値の根拠として）、万物の分類、価値付けを養い生み出し、天心（人心の反、克己者の心）を懐き、生み出された価値を徳によって養い育て、「無為」（己に執着しない）のあり方で、志、慮、思、意を位置づけ働かせ、「威勢」を行使する者である。士たる者が、もしこのレベルに到達したなら、「神」は盛んなものとなり、そこで「志」を養うことができるのである。

52」

1　陰符者、私志於内、物應於外、若合符契。故曰陰符。由本以經末。故曰、本經。

2　五龍、五行之龍也。龍則變化無窮、神則陰陽不測。故盛神之道、法五龍也。

3　五氣、五藏之氣也。謂精、神、魂、魄、志也。神居四者之中。故爲之長。心能舍容。故爲之舍。得能制御。故爲之大。然則養神之所宜、歸之於道也。

4　無名、天地之始、故曰、道者天地之始也。道始所生者、一。故曰、一其紀也。言天道混成、陰陽陶鑄、萬物以之造化、天地以之生成、包容宏厚、莫見其形、至於化育之氣、乃先天地而成、不可以狀貌詰、不可以名字尋、妙萬物而爲言。是以謂

之神靈。

5 神明稟道而生。故曰、道者神明之源也。化端不一則有時不化。故曰、一其化端也。循理有成、謂之德。五氣各能循理、則成功可致。故曰、德養五氣也。一者、無爲而自然者也。心能無爲、其術自生。故曰、心能得一、乃有其術也。

6 心氣合自然之道、乃能生術。術者道之由舍、則神乃爲之使。

7 十二舍者、謂目見色、耳聞聲、鼻臭香、口知味、身覺觸、意思事、根境互相停舍、舍有十二。故曰、十二舍也。氣候、由之出入。故曰、氣之門戶也。唯心之所操秉。故曰、心之總攝也。凡此皆受之於天。不虧其素、故曰、眞人。眞人者體同於天。故曰、與天爲一也。

8 內修鍊、謂假學而知之者也。然聖人雖聖猶假學而知。假學、卽非自然。故曰、以類知之也。

9 言人相與生在天地之間、其得一耳。但既出之後、隨物而化。故有不同也。

10 竅、謂孔竅也。言知事類、在於九竅。然九竅之所疑、必與心術相通。若乃心無其術、術必不通也。

11 心術能通、五氣自養。然養五氣者、務令神來歸舍。神既來舍、自然隨理而化也。

12 言能化者、在於全五氣。神其一長者、言能齊一志思而君長之。神既一長、故能靜和而養氣。氣既養、德必和焉。四者謂志、思、神、德也。四者能不衰、則四邊威勢、無有不爲、常存而舍之、則神道變化、自歸於身。神化歸身、可謂眞人。

13 一者無爲也。言眞人養產萬類、懷抱天心、施德養育、皆以無爲爲之。故曰、執一而養產萬類。至於志意思慮、運行威勢、莫非自然、循理而動。故曰、無爲以包也。然通達此道、其唯善爲士者乎。既能盛神、然後乃可養志者也。